

9月6日「新しい歌」エフェソ書5:6~20

1、光の子とは？

イエスは弟子たちに向かってこう言われました。「あなたがたは世の光である。」私たち一人一人にこの世界で光として歩むようにと言われるのです。理由も書いてあります。「ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」世の人々が私たちの行いを見て、「ああ、あの人はなんか素晴らしい人だな。どうしてだろう・・・どうやら教会に行っているかららしい！」そう思われるような光だということです。皆さんはいつもご自分が「光」と意識して生きていますか？なかなかハードルが高く感じます（汗）。

ただ、イエスはこの言葉を単に「善人になれ」とか「人格者になれ」という意味で語ったのではないと私は思っています。と言うのは、イエスはこれをいわゆる「普通の人たち」に語ったのではないからです。山上の説教を聞きに集まってきたのはこんな人たちでした。「マタイ 4:23 いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人」当時、大きな病気をした人たちや悪霊に取りつかれた人（精神疾患かもしれない）は、本人か家族の罪がその人に現れたと思われ蔑まれていました。それから「5:25 ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から大勢の群衆が来て・・・」ユダヤ人だけではなく、異邦人や外国人、神の民ではないと考えられていた人々も集まっていたと。つまり、一般的には「善人」とは思われていない、むしろ厄介者や罪人と思われていた、そんな人たちに向かってイエスは言うのです。「あなたたちこそ世の光だよ！あなたの存在が、あなたの生き方が世界を照らすんだよ！自信をもって生きていくように！」

これは弟子たちの記憶に相当残ったようです。自分たちのことをイエスから招かれた「光の子」として自信をもって愛と宣教の業に励みました。そして仲間に加わってくれた人たちにも同じように呼びかけたのです。それが今日のエフェソの言葉です。「5:8 あなたがたは、以前には暗闇でし

たが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。」
厳しい現実を歩む人々がどれほど励まされたでしょうか！

2、キリスト者としての自覚を忘れない

さて、自分たちが「光の子」であることの自己理解。これは、ヨハネ福音書やエフェソ書など、時代を追うごとに強くなっていったようです。それはおそらく、ローマ帝国からの迫害が厳しくなったことや、ユダヤ教と完全に分離したことなど、教会が置かれた社会的な状況も関係していると思います。また、こうあります。「エフェソ5:3~4 **あなたがたの間では、聖なる者にふさわしく、みだらなことやいろいろの汚れたこと、あるいは食欲なことを口にしてはなりません。卑わいな言葉や愚かな話、下品な冗談もふさわしいものではありません。**」教会はすごい勢いで発展していきました。色んな地域で急速に信徒が増える一方で民族や国籍を超えた多様な人たちが集まるようになりますから、価値観も一定ではありません。中には、言葉が悪かったり、下品だと思われる人たちもいたのでしょう。さらにグノーシス主義など教会の内部から異端的な教えが発生してきたこともありました。今日のエフェソ書にも「**16 節 今は悪い時代なのです**」とあります。教会そのものも敵と味方、善と悪の情報が錯そうし、混乱していたのです。それは、グローバル化が進み、技術革新によって、多様な倫理観や価値観がものすごい勢いで現れては消えていく現代社会と似ています。だから、殊更に「光」として歩むように勧められるのです。キリストに選ばれ、救われた民としての自覚を忘れてはならないと。

ここで、少しだけ気を付けたいと思うことは、この世界を「光と闇」「善と悪」「神の民とそれ以外」のように割り切って理解するのは簡単です。そして、自分と合わない考えを持つ人、自分の理解できない価値観の人、自分とは異なる人々を「闇、悪、敵」などに置き換えていけば自分はいつも「光の子」でいられます。自分はいつも肯定されています。こんなに楽ちんで素敵な宗教はないでしょう。でも、それはイエスが語られたことではありません。それは偽善と欺瞞で満ちています。私たちは「光の子」として神さまに祝福された者でありながら、同時に抱えきれないほどの罪を負

っています。イエスを信じることによって赦され、愛されて初めて「光の子」として歩めるのです。私たちがすべきことは他者を「闇、悪、敵」と断罪し裁いていくことではなく、イエスが私たちにしてくださったように互いに愛し合い、冷酷さと厳しさに満ちた世の中に愛と温もりを育てていくことです。不正と罪にまみれた社会で、正義と憐れみを語っていくことなのです。「エフェソ 5:1 あなたがたは神に愛されている子供ですから、**神に倣う者となりなさい。**」そういう意味で、今日のテキストで繰り返されるこの言葉は印象的です。「**10 節 何が主に喜ばれるかを吟味しなさい**」「**17 節 だから無分別な者とならず、主の御心が何であるかを悟りなさい**」私たちは私たち自身の価値観や正義が正しいから光の子なのではありません。聖書に学び、神の御旨を求めて行く時に初めて光の子としての歩みが始まるのです。

3、新しい歌を

最後に、今日のテキストから気になった言葉を紹介します。「**酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。**」酒でなく、霊に満たされなさい。そのために「**詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい！**」なかなか素敵な言葉だと思います。昨年度、創立 130 周年ということで、ずいぶんこの話をしましたが、私たちはメソジストという教派に属しています。この教派は始まった時には「歌うメソジスト」と呼ばれました。創始者のウェスレー兄弟の弟のチャールズは生涯で 6000 の讃美歌を作詞し、多くの新しい歌を歌ったのです。ついでに言えば、アルコール依存症からの脱却のために「禁酒」を説いたのもメソジストの重要な教えです。酒に満たされるのではなく、霊的な歌に満たされるのは私たちの教会としての信仰の原点と言えるかもしれません。

そんな私たちにとって、コロナ禍によって状況は一変しました。日本でもカラオケ店でクラスターが発生した事例は頻繁に目にします。海外の教会では聖歌隊や大規模な礼拝でクラスターが発生し、礼拝を禁じられた教

会もあるようです。この中にも何よりも歌いたくて、礼拝に来られている方もおられるでしょう。聖書は一人でも読めます、祈りも一人でもできます。でも一人きりで賛美できるという人はなかなかいません。礼拝と賛美はイコールで結ばれている面もあるかもしれません。集まって歌うことの禁止はもはや信仰の危機と言っても過言ではないでしょう。

今日の御言葉によって賛美とは何かを改めて考えさせられます。「**酒に酔いしれてはなりません。それは身を持ち崩すもとです。むしろ、霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。**」私たちは礼拝に集います。それはもちろん御言葉を「聴く」ためですが、礼拝には「対話」という要素もあります。「**詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、**」神からの語り掛けとしての御言葉への応答として私たちは歌を歌うのです。賛美とは対話なのです。もし、賛美が単に「声を出すこと」ではなくて「神との語り合い」であるなら、私たちはコロナ禍の中にあっても賛美することが出来るかもしれません。賛美の際のアナウンスで私が気を付けていることがあります。「歌わないでください」とは一度も言ったことはありません。「心の中で賛美を合わせてください」とお伝えしているのです。今日も私たちは一緒に賛美することが出来ると思います。私は代表して声を発するのは私一人ですが、決して一人きりで賛美しているとは思っていません。心は皆さんと共にあると信じています。今日も一緒に「**霊に満たされ、主に向かって心からほめ歌いましょう！**」